



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4068 号 2017.12.9 発行

授産品スイーツブランド化を パティシエが助言 岐阜新聞 2017年12月9日坂井寛卓さん(右)に洋菓子を食べてもら参加者=岐阜市下奈良、県福祉会館



クッキーなどの洋菓子を製造・販売する岐阜県内の授産施設が菓子の品質向上のためパティシエからアドバイスを受けるセミナーが、岐阜市下奈良の県福祉会館で開かれた。これまでは各施設の自助努力の範囲だったが、連携して「授産品スイーツ」のブランド化を目指そうと初めて開催した。

県社会福祉協議会から販売事業を受託する企業「マントゥマン・アニモ」(同市)が主催。県内の13施設から担当職員ら約20人が参加した。

同社によると、授産施設での洋菓子の製造は、味や見た目とともに調理する障害者の作りやすさを重視する必要がある。一方で、近年は授産品への理解が進み、品質がよければ高価格でも販売を見込むことができる環境となってきた。セミナーを開催することで、業界全体のボトムアップや意識改革につなげようと企画した。

講師として招かれた洋菓子店「ル・スリジェダムール」北一色店の坂井寛卓店長(35)が、各施設のクッキーやシフォンケーキなどを実食して品評。担当者は、よりおいしい洋菓子とするために材料の分量をどの程度まで変えることができるかなど、さまざまな質問を投げかけた。

坂井さんは「こんなに質問が寄せられるとは予想外だった。皆さんが授産品づくりに情熱を傾けていることがひしひしと伝わった」と感銘を受けた様子。地元産の柿を使ったパイの試作品を持ち込んだ福祉作業所「豊住園」(瑞穂市)の武藤由美施設長は「他の施設の担当者も、おいしい洋菓子を作ろうと工夫を凝らしていることが分かり、勇気づけられた」と話していた。

不調者出さない職場に 静岡で日本産業ストレス学会 静岡新聞 2017年12月9日メンタルヘルス対策の1次予防をテーマに開かれた日本産業ストレス学会=8日午後、静岡市駿河区



日本産業ストレス学会が8日、静岡市駿河区のグランシップで始まった。「ストレス社会における産業保健・産業看護 1次予防へのパラダイムシフト」と題し、職場のメンタルヘルス対策に詳しい全国の有識者が学術発表や議論を交わした。

初日のメインシンポジウムでは、改正労働安全衛生法によるストレスチェック制度開始から2年を迎えたことを受け、不調者を出さない職場づくりなどメンタルヘルスの1次予防について産業医や産業保健師、精神保健福祉士らが意見

交換した。

ストレスチェックの集団分析結果を踏まえた職場環境改善の継続的な取り組みや、健康管理部門だけでなく経営層や人事部門との連携の重要性などが指摘された。

同学会は9日まで。9日は職場改善の具体事例やストレスチェック実施を踏まえた問題点と対策についてのシンポジウムなどを予定している。

視覚障害者とホーム歩く 天王寺

読売新聞 2017年12月09日

◇JR 駅員ら誘導学ぶ

視覚障害者に駅ホームを安心、安全に利用してもらうため、JR西日本は8日、駅員がどのように視覚障害者に声をかけ、誘導すべきかを学ぶ勉強会を天王寺駅（大阪市天王寺区）で開いた。

約70人が参加。駅員と視覚障害者が2人1組になり、ホームの端を歩いたほか、線路上に転落するなどした場合を想定し、線路に下りてホームまでの高さや、ホーム下の退避スペースの広さを確認した。

その後、大阪支社で駅員と視覚障害者が意見交換。視覚障害者からは「駅員の対応で『少しお待ちください』と言われることがあるが、見えていないので待っている間、不安に感じる」「点字ブロックが摩耗している駅があった」などの意見が出された。

四条畷駅駅員の土川千佳さん（34）は「視覚障害の方が何を求めているのかを学べた。職場で共有したい」と話していた。

子どもの権利条例理念広めたい

東京新聞 2017年12月9日

フォーラム設立総会に集まったみなさん＝高津区で（かわさき子どもの権利フォーラム提供）



川崎市が全国に先駆けて二〇〇〇年に制定した子どもの権利条例の理念をあらためて広めようと、制定に関わった元市職員や学識経験者らが、市民団体「かわさき子どもの権利フォーラム」を設立した。十七日に高津区でシンポジウムを開き、子どもたちをめぐる現状と課題を話し合う。（大平樹）

権利条例は、子どもに「安心して生きる権利」や「ありのままの自分である権利」などがあることを明文化し、子どもの人権を総合的に保障している。

政府が一九九四年に批准した国連子どもの権利条約が定める、子どもの自己決定権や意見を表明する権利も盛り込み、二〇〇〇年十二月の市議会で全会一致で可決された。

フォーラムは今年八月に設立され、代表には市教育委員会の職員として条例案の策定に携わった山田雅太（まさた）さん（64）＝市生涯学習財団理事長＝が就いた。山田さんは、市内の小中学校などで、条例で保障している権利について子どもたちや教員に講演している。

山田さんによると、フォーラムの設立は、一五年の川崎区での中一男子殺害事件がきっかけだった。事件の背景には不登校や貧困、外国人支援などが複雑に絡み合っていたとされ、市内の教育機関や子どもの支援団体関係者たちに、「条例の理念が社会に浸透していないのではないか」との危機感が生まれたという。

山田さんは「子どもたちが自分自身の権利を理解することは、他人の権利を尊重することにつながる」と権利教育の重要性を訴える。フォーラムの活動を通じて「条例の理念を生かし、困っている子ども自身がSOSを発することができて、大人がそれを受け止めら

れる社会にしていきたい」と語る。

事務局を務めるのは、条例制定当時高校二年生で、「子ども委員」として条例案づくりに関わった川崎区の円谷雪絵さん（34）。二人の子どもを市立小中学校に通わせている円谷さんは「条例のことを子どもに正しく伝えられる教員が少なく、さみしく思っていた。市民の立場で理念を根付かせていきたい」と話す。

シンポジウムは十七日午後二時から、高津区溝口の四の一、高津市民館大会議室で。市と市教委が主催し、内容はフォーラムが企画した。子どもの権利に詳しい早稲田大の喜多明人教授や、条例制定を受けてできた市子ども夢パーク（高津区下作延）の西野博之所長が講演。参加者たちはいじめや不登校、子どもの権利学習、子ども食堂の役割、乳幼児の権利などのテーマに分かれて話し合う。

参加無料で事前申し込み不要。託児所はないが子連れでの参加も可能。問い合わせは、かわさき子どもの権利フォーラム事務局＝電080（3471）6448＝へ。

倉吉で活動「DJ Yuta & Yuichi」 初の海外公演、実力発揮 韓国の障害者フェス出演 /鳥取



毎日新聞 2017年12月9日
シンセサイザーとキーボードで演奏する井谷優太さん（左）と中原勇一さん＝鳥取県庁で、小野まなみ撮影

東京パラでの演奏目指す

倉吉市や東京都を拠点に活動する音楽家、井谷優太さん（32）と中原勇一さん（47）による音楽グループ「DJ Yuta & Yuichi」が、韓国江原道（カンウオンド）で1日にあった「全国障がい者幸せ分かち合いフェスティバル」で演奏した。8日、県庁に平井伸治知事を訪問した2人は初の海外公演を報告し、庁内でミニライ

ブを開いた。【小野まなみ】

名古屋 広がる「ボッチャ」の輪 東海初の企業対抗戦 毎日新聞2017年12月9日



パラリンピック競技のボッチャの企業対抗戦に参加する人たち＝名古屋市中区で2017年12月8日午後6時28分、木葉健二撮影

重度脳性まひなどで手足の不自由な人向けに考案されたスポーツ「ボッチャ」に健常者も参加し、オフィスでのレクリエーションや社会人交流に活用する動きが広がっている。企業対抗のボッチャ大会が8日、東海地方で初めて名古屋市中区で開かれた。パラリンピックの正式種目となっており、2020年の東京五輪・パラリンピックに向け注目が高まりそうだ。【太田敦子】

同市中区の三井住友銀行「SMBCパーク栄」のイベントスペースで8日夜、企業対抗のボッチャ大会「オフィス・デ・ボッチャ」が開かれた。経団連など三つの経済団体で作る協議会が主催し、7月と11月に東京で開いたのに続き3回目。愛知県内の自動車関連メーカーや商社、銀行など32の企業・団体がトーナメント戦に臨み、応援を含め約200人が参加した。

ボッチャは昨年のリオデジャネイロ・パラリンピックで、日本がチームで銀メダルを獲得し注目を集めた。経済団体が力を入れるのは、パラスポーツの振興により共生社会の実現を目指すとともに、体力とは無関係に競えるボッチャを通じ、スポーツに親しんでもらう狙いがある。

大会を前に、協議会は秋以降、愛知県内2カ所で体験会を実施、各企業も初心者向け教室を開いた。会場を提供した三井住友銀行では、大会出場をかけた予選会に約100人が集まるなど盛り上がりを見せた。

同行代表チームで逆転を決めた木下恭介さん(35)は「奥が深いスポーツ。みんなで盛り上がるから続けていきたい」と声を弾ませた。愛知製鋼の星野美沙紀さん(26)も「始めてまだ2週間ですがコントロールがうまくいきました」と笑顔を見せる。

協議会は今後、福岡市や仙台市でも大会を開く予定。担当者は「ボッチャは障害者と健常者がともに楽しめるユニバーサルスポーツ。大会を機にレクリエーションとして浸透していくことを期待したい」と話している。

ボッチャ

2チームがそれぞれ青と赤の球を6球ずつ投げ、「ジャックボール」と呼ばれる白い目標球に最も近い球を投げたチームに点数が入る。ルールが似ていることから「地上のカーリング」とも呼ばれる。重度の脳性まひや四肢に障害がある人のため欧州で考案された

最期まで口で食べて欲しい お年寄り口ケア研修に1億円 朝日新聞 2017年12月9日

お年寄りらの口腔(こうくう)ケアをするスタッフへの新たな研修制度を厚生労働省は創設する。歯科医師や歯科衛生士がいない現場でも専門的なケアができるよう、病院や介護施設の看護師や介護スタッフに学んでもらう。最期まで口から食べることの支援や誤嚥(ごえん)性肺炎を減らすことにつなげる狙いがある。

研修は、歯科医師や歯科衛生士が講師を務める。患者らが自分でうまく出せないたんを専用のジェルを使って除去する、食事や会話が続けられるよう器具を使い口の周囲の筋肉を鍛える、といったケアの方法を教える。病気ごとにケアをする際の注意点を伝えることも想定する。

厚労省は来年度、この研修に約1億円を充て、実施する自治体に経費の半額を補助する方針。厚労省によると、2014年時点で歯科の診療科がある病院は全国で約2割。介護施設などを訪問する歯科医師や歯科衛生士のニーズは高まっているが、その数は追いついていない。新たな研修制度によって適切なケアができる施設を増やしていく。

口の中には多数の常在菌がいて、唾液(だえき)にまじって気管内に入ると、誤嚥性肺炎の原因になる。要介護者への口腔ケアは、肺炎の発症を抑えることがわかっている。また、口腔ケアが入院期間を短縮させるという報告もある。歯科医師らによる専門的なケアを受けた患者と一般的なケアを受けた患者を比べると、専門的なケアを受けた患者は10~20%程度、入院日数が短かった。(福地慶太郎)

「旦那(アキラ)さんはアスペルガー」夫を描き続ける漫画家がみつけた「普通なんてどこにもない」 産経新聞 2017年12月9日

1巻「旦那(アキラ)さんはアスペルガー」(コスミック出版)より

漫画家の野波(のなみ)ツナさんは、発達障害の1つ「アスペルガー症候群」の夫との日々を赤裸々に作品に描いている。コミックエッセー「旦那(アキラ)さんはアスペルガー」シリーズ(コスミック出版)で、すでに8巻を数える。描き続ける理由は何なのだろうか。

大切なことを共有できない

発達障害は、生まれつき脳の機能に障害があるために起きると考えられている。アスペ

ルガー症候群はその発達障害の1つで、「自閉症スペクトラム障害」に含まれる。人との意思疎通や交流が難しい、とされ、(1) 社会性 (2) コミュニケーション (3) 想像力に



困難や障害があるのが基本的な特性だ。性格や環境によって個人差はあるが「特定のものごとに強いこだわり」「場にそぐわない言動」「他者の気持ちを想像できない」「規則や習慣にこだわる」などの特性もみられる。

野波さんは、1994年、編集者だったアキラさんと結婚した。アスペルガー症候群だとは気づかなかった。

物事の優先順位が付けられず、思ったことをそのまま言ってしまうアキラさんの行動は、次第にトラブルを引き起こすようになる。

自宅の購入は任せきりにされた。突然仕事を辞めた。将来のことを話し合いたくてもできなかった。否定されるのが怖いのか、黙ってしまうからだ。知らぬ間に

に300万円の借金。結局、自宅は売却する羽目に...

「悩んだり、困ったりしているときに話し合いができなかった。大切なことを共有できない生活に疲れました」

野波さんは振り返る。

「ほかにもいるはず」とエッセー漫画に

結婚から16年が過ぎた2010年、知人から宮尾益知(みやお・ますとも)医師を紹介された。発達障害に詳しい宮尾医師は、アキラさんがアスペルガー症候群だと診断した。

「アスペルガーという言葉は知っていましたが、もっと特別だと思っていました。アキラさんは普通の学校に通い、普通に就職していた。だから診断を受けて驚いたし、同じような人がほかにも大勢いるはずと考えました」

だから、アキラさんとの日々を漫画に描いた。そして、11年1月に1巻「旦那(アキラ)さんはアスペルガー」が発売されると想像以上の反響があった。

「うちの夫のことかと思った」

野波さんのブログにも100通を超えるメッセージが届いた。その年の秋には2巻目を出版。その後も、子供たちの視点から描いたり、アスペルガーの夫やパートナーを持つ女性の悩みを取り上げたりと、さまざまな角度から描き続けて8巻までできた。

「メディアに取り上げられるのは、就労や人間関係に困難を抱える重篤な状態の方であることが多い。だから、アキラさんのように発達障害でも仕事をしていたり、結婚をしていたりという、『たいしたことがない』と思われてしまいがち」

しかし、アスペルガーは、言語能力や会話能力に明らかな問題がないから発見されにくく、周囲から「男の人ってそういうもの」「よくある話よ」と苦しみを理解されないがゆえに追い詰められてしまう家族も少なくないのだ。

「発達障害の人と暮らす人がいる、ということを知ってもらえたら」

アスペルガーの夫との日々を描き続ける、切実な理由を語る。

短所が長所に...恋愛時代は気づけなかった

最新の8巻「アスペルガーと知らないで結婚したらとんでもないことになりました」では、さかのぼって出会いから結婚までを描いた。

「どうして気づけなかったの？」

アスペルガーの夫やパートナーを持つ人がよく言われる言葉だが、「アスペルガーの人は恋愛時代に魅力的に映るんです」と説明する。



最新刊では、「結婚前に分からないことがある、ということを書いたかった」。

流れに逆らわないアキラさんの生き方を、野波さんは「ガツガツしていない」と好ましく感じた。披露宴では野波さんを「私の宝」と熱烈に表現してくれた。思ったことを迷わず口にするのがアスペルガーの特性だとは、後から知った。

「今なら気づくことがたくさんある。当時は何も知らなくて、思い違いをしていた。そのことに向き合わなくちゃいけないのはつらい作業でもありました」

家族の記録...「誰も悪くない」と思えた

シリーズは8巻20万部と出版不況と呼ばれるなかで支持を集めている。今年になって電子書籍版も発売され、新たな読者の獲得も続いている。

家族にも変化があった。11年の春にアキラさんと別居したのだ。おかげで関係は改善されたし、これまでに起こったことを落ち着いて振り返る機会にもなった。

『普通』にとらわれていたことに気づきました。普通の夫婦、普通の家族、と理想を追っていた。でも、普通なんてどこにもないし、よその家庭をまねする必要もない。よそと違うから不幸でもない」

アキラさんに家族が振り回されたのは確かだが...

「別居して、お互いにストレスから解放された。子供2人も良い子に育ってくれている。『普通』の形にこだわって一緒に住み続けていたら、子供もストレスだったでしょう」

アキラさんの特性を理解することで責める気持ちも、自分を嫌いになることもなくなった。

「誰かが悪いわけではない、と見つめ直せたのが良かったですね」

しかも、お互いが過ごしやすくなるヒントも見つけた。

「私たちが日常で無意識にやっていることでも、できないことがある。アキラさんは『ごちそうさま』とか『いただきます』とか言えなかった。ならば、ルール化すればいいだけ」

近所に住むアキラさんは、野波さんの家に子供を訪ねたり、突然お菓子を持ってきたりする。

新刊をアキラさんに見せ、「描いてほしくないことがあったら言ってね」と感想を求めると、「4コマ漫画なのにオチが弱いですね」と返ってきた。「感想を聞いても、批評が返ってくるんですよ」と野波さんは苦笑いする。

「描き終えるたびに、これで最後と思うんですが、しばらくすると描きたいことが出てきます」

“家族”の記録は、まだまだ続きそうだ。(文化部 油原聡子)

アスペルガー症候群 人との意思疎通や交流が難しい「自閉症スペクトラム障害」(ASD)の1つ。生まれつきの脳機能障害が原因とされる。「社会性」「コミュニケーション」「想像力」に困難がある。言語能力や会話能力に明らかな問題がないため発見されにくい。幼少期に見過ごされ、大人になってから「生きづらさ」を感じて気づくケースも増えている。大人の発達障害専門外来も出てきている。



設立10年 アダルトチルドレン自助グループ「ほっとはーと」

愛媛新聞 2017年12月9日

ACの生きづらさを分かち合う「ほっとはーと」の会合=11月15日、松山市三番町6丁目

【生きづらさ、分かち合う】

幼少期の家庭環境が原因で大人になっても生きづらさを感じてしまうAC(アダルトチルドレン)。当事者が過去や悩みを話し合い、つらさからの回復を目指す松山市の自助グループ「ほっとはーと」が11月で設立から10年を迎えた。仲間と思いを共有し、理

解し合える場として定着している。

ACは、親のアルコール依存症や虐待などで受けた心の傷により不安感や孤独感が強く、自己肯定感が低かったり、周囲を過度に意識して自分の感情を抑え込んだりしてしまうといった特徴がある。

代表を務める市内の稲穂まゆみさん（56）は、悪いことをしていないのに怒鳴りつけてくる強権的な父親と、子どもに無関心な母親のもとで育った。過呼吸やパニック障害の症状に悩まされ、職場ではいじめに遭うなどした。約20年前に父親が亡くなった後に自分がACだと気づき、同じような体験をした人が思いを分かち合えたらと、2007年に自助グループを設立した。

【成育環境など吐露・回復のきっかけに】

市内で月1回開く会合は、体験や思いを打ち明け、意見や批判はしない「言いつばなし、聞きつばなし」と、自由に意見を交わす「ミーティング」の2部で構成する。参加者は40～50代が中心で、初めての人から何度も通うベテランまでさまざまだ。

11月中旬の会合には、20～50代の男女5人が市内外から集まった。稲穂さんが「弁論大会ではないので思いを吐き出して」と優しく語り掛け、「言いつばなし」がスタート。それぞれが複雑な家庭で育った子ども時代や現在抱えている悩みを吐露した。

一方、「ミーティング」は質疑応答を取り入れ、和気あいあいとした雰囲気。この日初めて参加した市内の20代男性は「生まれ育った環境など自分の過去を気兼ねなく話せ、少し気持ちが軽くなった」とほっとした表情を見せた。

ACからの回復は自己肯定感が高まり、人間関係をスムーズに構築できるようになった時だとみられている。「回復への道は人それぞれだが、自分を見つめ直し、自身の問題の根っこが何かを考えることが大切。相手の立場でも考えていく過程で憎しみを許す方法が見つかる場合もある」と稲穂さんは説明する。回復に近づいてくると、率直に自分の気持ちを表現でき、表情も明るくなっていくという。

心理療法の専門家を招いたセミナーやメール相談も地道に続けてきた。稲穂さんは「参加者がいい方向に変わっていく様子を間近で見られるのがうれしい。まずはACを自覚することが回復への第一歩。弱い部分も見せられるこの場所で心の荷下ろしをしてもらえれば」と願っている。

問い合わせは、ほっとはひと＝電話 090 (6282) 3355、メール hotheart_2009@yahoo.co.jp

社説 子育て2兆円パッケージ 肝心なところが後回しだ 毎日新聞 2017年12月9日

「人生100年時代、生涯を通じて質の高い教育を用意する」。政府は教育無償化を柱とする2兆円規模の政策パッケージをまとめた。高齢者に偏った社会保障を「全世代型」に変えるという方向性は正しい。

しかし、安倍晋三首相が総選挙の際に唐突に掲げた公約を短期間でまとめたため、大事な論点がいくつか煮詰めきれず先送りされた。

0～2歳児の保育所は住民税非課税世帯を対象に、3～5歳児は幼稚園や認可保育所は全世帯を原則無償化する。国立大学の授業料も住民税非課税世帯を対象に免除する。

ただ、高額な料金のかかる私立幼稚園については全額補助をしない。私立大の授業料免除も一定の上限を設けることになった。

議論となっていた認可外保育施設は結論を先送りした。私立高校については「財源を確保した上で」という条件で無償化することになった。

経済的に余裕がある人ばかりが認可外保育施設を利用しているわけではない。認可保育所に入れないため、やむを得ず無認可保育所を選んでいる人もいる。どうして線引きをするのか、納得できる根拠が必要だ。

私立幼稚園や私立大については補助額の上限がどの程度の水準になるかが問題だ。学費も生活費も返済型奨学金に頼って私立大に通っている学生は少なくない。不公平感を解消

する制度設計が必要だろう。

本来であれば認可・無認可、国立・私立を問わずすべて無償の対象にすべきだろう。しかし、それを実現するには膨大な財源が必要だ。

今回の「2兆円」は消費税率を10%にしたときに借金の穴埋めに充てる分から1兆7000億円を回し、足りない分は経済界が支出することでようやく確保した。借金返済分を使うというのでは、次世代にツケ回しするのと同じだ。これで「全世代型」と言えるだろうか。

教育無償化は「人づくり革命」の一環としてまとめられた。「現役世代の不安を解消し、希望出生率1・8を目指す」という。少子化対策が真の目的なら、保育所不足の解消や男性の育児参加を優先する方が効果があるとの説が有力だ。

場当たりの人気取り政策で終わらないためには、理念的な裏付けと入念な制度設計が必要だ。

社説 人づくり 無償化の効果が見えぬ

京都新聞 2017年12月09日

安倍晋三首相が衆院選で公約した幼児教育・保育や高等教育の「無償化」を柱とする2兆円の政策パッケージが閣議決定された。

社会全体で子どもと子育て世代を支え、老若男女を問わず意欲のある人の就労や学びを後押しする。長寿化と人手不足の中、そうした方向性は重要だ。

問題は、巨額を投じて無償化を優先することが、目下の課題の解決に効果的なのか、という点である。

政策パッケージでは、2歳児までの保育料と大学授業料の無償化を低所得世帯に限定した一方、3～5歳児については認可保育所、幼稚園、認定こども園に通う全員を支援の対象とした。

保育の受け皿が足りない現状で、無償化すればどうなるか。利用希望者がさらに増え、入園先を探し回る「保活」も待機児童も解消されないのではないか。保護者のこうした懸念の声に、政府は明確に答えていない。

家計に余裕のある世帯ほど恩恵が大きい点も見逃せない。認可保育所の利用料は所得水準の高さに応じて上がるため、一律の無償化は富裕層に有利な政策だ。懸案だった認可外施設の扱いは今後の専門家の議論に委ねられたが、支援対象が絞られれば、不公平感が一段と増すことになる。

衆院選からわずかに1カ月半。与党内の議論すら不十分なまま、とりまとめを急いだ首相官邸の姿勢は「結論ありき」との批判を免れない。

大学無償化をめぐる積み残しがある。「高校時代の成績だけで判断せず、学習意欲を確認して支援対象を決める」という方針は、できるだけ多くの生徒にチャンスを与える点で理解できる。ただ、本人の向学心や入学後の教育成果をどう測るのか、透明で公平な制度設計は可能なのか、見通しは立っていない。

社会人対象の「リカレント（学び直し）教育」やキャリアアップ支援を強化するのなら、まず既存施策の問題点を詳しく検証する必要がある。

教育や人材育成は、とかく理念先行で政策効果の客観的な分析や検討がなおざりにされがちだ。保育の需要予測もこれまで甘さが目立つ。確かな裏付けと見通しなしに、消費税増税の貴重な収入をばらまくことは許されない。

先進国で最悪水準の財政状況の下、2兆円の財源は財政健全化を先送りして確保する。その重みを政府・与党は肝に銘じるべきだ。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

